

カール・ルウェリンとからかい上手の分身

菊 地 諒*

人生という高貴なる子供芝居に対する同一の軽視、小さきものを限りなくいつくしみながら卑小なるものに対する同一の敵視、名誉なき利己心に対する同一の憤怒、地上という美しき瘋癲病院における同一の哄笑の衝動、名声の声に対してではないが人々の声に対する同一の無感覚、これらは、彼らを2つの体に住まう1つの魂にするための最初の共通点にすぎなかった。

——ジャン・パウル¹⁾

私が「概念法学」、すなわち今日のローマ法学におけるスコラ学に対して試みた攻撃は、私にとって真面目以外の何物でもありません。そして、私がある攻撃をする際に冗談、ユーモア、嘲弄という武器と諷刺文を使った時、それは真面目そのものだったのです。

——ルドルフ・フォン・イエーリング²⁾

目 次

はじめに

- I 教えられた伝統 (Taught Tradition) の原則——付き従え!
- II 術語の多義曖昧性 (Multiguity of Terms) の原則——編み出せ!
- III 預金銀行業務 (Deposit Banking) の原則および翻訳 (Translation) の原則——信じ込め!
- IV 偏重 (Partiality) の原則および穴 (Hole) の原則——言い放て!

* きくち・りょう 立命館大学法学部准教授

** 引用文中の〈 〉はイタリック体による強調を、[] は筆者による補いを意味する。

1) ジャン・パウル (Jean Paul, 1763-1825) の『ジューベンケース』より引用した (パウル 2000: 33-34)。

2) ルドルフ・フォン・イエーリング (Rudolf von Jhering, 1818-1892) の『法学における冗談と真面目』より引用した (イエーリング 2009: 367)。

- V 匿名非言及 (Anonymous Non-Citation) の原則および転嫁されたナンセンス (Imputed Nonsense) の原則——押し通せ!
 - VI 利用不可能な権威 (Unavailable Authority) の原則——煙に巻け!
 - VII 争点の非結合 (Non-Joinder of Issue) の原則——逃げ回れ!
 - VIII 暗黙の冷蔵保存 (Tacit Cold Storage) の原則——聞き流せ!
 - IX 通貨の堅牢性 (Solidity of the Currency) の大原則——勝ち誇れ!
- おわりに

はじめに

本稿は、リーガル・リアリズムを代表する法学者であるカール・ルウェリン (Karl N. Llewellyn, 1893-1962) が³⁾、スウィフト・トイフェルスドレック (D. J. Swift Teufelsdröckh) の名義³⁾で発表した論文「法理学、文明の王冠——または初学者に明かされる法理学の書き方の諸原則」について検討するものである。この論文は、数あるルウェリンの奇妙な論文の中でも、群を抜いて奇天烈な一品である。さっそく、その書き出しを見てみよう。

文明の証は、砂漠の開花である。文明とは、それまで1本の草しか生えていなかった場所、または何も生えていなかった場所に、2本の草ではな

3) ルウェリンは、自身の「もう1つ的人格 (alter ego)」(Hull 1996 : 117) を、トマス・カーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881) の『衣服の哲学』に登場するディオゲネス・トイフェルスドレック (Diogenes Teufelsdröckh) という架空の哲学者と、『ガリバー旅行記』で知られるジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift, 1667-1745) に肖って「ディオゲネス・ジョナサン・スウィフト・トイフェルスドレック」と名づけた (Llewellyn 1942 : 225-226)。『衣服の哲学』は、ドイツのヴァイスニヒトヴォー市 (「どこか分からない場所 (Weissnichtwo)」) に由来) の大学教授であるトイフェルスドレック (「悪魔 (Teufel)」の「糞 (Dreck)」) に由来) から送られた手稿を整理しつつ紹介するという設定で書かれている (カーライル 2014 : 3-41)。

なお、ルウェリンがトイフェルスドレックの名義で発表した文章はもう1つある。『ハーヴァード・ロー・ルヴュ (*Harvard Law Revue*)』というパロディ雑誌に形成された論文「法理学の万能溶媒——または矛盾した謎と解かれた矛盾」である (Llewellyn 1942 : 226 §)。そのほか、未発表となったトイフェルスドレック名義の文章も存在する (Hull 1996 : 117-118 n. 9)。

く、多数の家畜の飼料となる草を生やすものである。法理学は、文明の王冠としての正当な地位を求めて、ゆっくりと手探りで進んできた。考えを巡らせるだけで、探し求めていた報いを手に入れることができるであろう（Teufelsdröckh 1938 : 171）。

この書き出しにおいて、すでに、この論文に通底する重要な特徴を垣間見ることができる。まず、比喻を活用した修辞学的な表現が目を引く。また、「砂漠の開花」という比喻が『イザヤ書』の記述を念頭に置いたものであろう⁴⁾ことから推知されるように、人文学的な教養が鑲められている。さらに、法理学を「文明の王冠」すなわち頂点になぞらえるという諧謔は、トイフェルスドレック＝ルウェリンが操る最大の武器である。そのため、この論文は、法学者が書いたものとしては通常あり得ないことだが、ある種の諷刺文学の様相を呈している。

ただし、論文の構造自体はきわめて単純である。すなわち、トイフェルスドレックが、法理学に興味を持った初学者に向けて、功成り名遂げるための秘訣を1つずつ伝授するというものである。本稿では、トイフェルスドレックが説いた諸原則を順番に読み解きつつ、その背後に隠されたルウェリンの意図についても解き明かしてみたい。

I 教えられた伝統(Taught Tradition)の原則 ——付き従え！

トイフェルスドレックは、法理学がどのように「砂漠」を開拓してきたかを描いて見せている。まず、「油を燃やす原野において、これほどわずかな燃やすべき油と、これほど多くの養うべき口を与える無慈悲な自然が、どこにあるか？」（Teufelsdröckh 1938 : 171）という問いが投げかけ

4) 『イザヤ書』35章1-2節には、「荒れ野と乾いた地は喜び／砂漠は歓喜の声を上げ／野ばらのように花開く。／花は咲き溢れ／大いに喜びの歌声を上げる」（日本聖書協会 2018 : (旧)1100）とある。

られる。ここで、「燃やすべき油」は、議論の燃料となる観念を象徴し、「養うべき口」は、その観念に知的な糧を求める人々を意味する。現実の世界は、議論の基礎となる観念の提供を惜しんできたということであろう。したがって、この砂漠を観察すると、「法理学がそれを中心に回っている(回るべき、回らねばならない)ところの、法と正義の大いなる関係」(Teufelsdröckh 1938: 172)について、きわめて不毛な観念しか存在しない。

トイフェルスドレックは、法理学が観念の枯渇を克服する様子を、封建制に準えている。領主は、教育を通じて学閥を構築し、自らの観念を弟子に分け与えていく。したがって、「領主に気に入られ、忠誠を誓う者は、強固で堅実な所有権と、領主の観念を完全に利用する十分な法的な権利を獲得し、正当な敬意だけが定期的に捧げられるであろう」(Teufelsdröckh 1938: 172)。すなわち、家臣が領主に忠誠を誓って封土を獲得するように、弟子は自らの学閥の知的権威に追従して観念を獲得する。このように、「その一門の、教師と認定された弟子たちによるこの原則、すなわちこの教えられた伝統の原則⁵⁾によって、法理学は、それまで1の生計しか立た

5) この原則は、ロスコー・パウンド (Roscoe Pound, 1870-1964) を意識したものであろう。たとえば、パウンドの『コモン・ローの精神』は、「現代の世界において、我々がコモン・ローと呼ぶ英米の法的な伝統ほど、生命力と粘り強さを示す制度はないであろう」(Pound 1921: 1) という書き出しで始まる。さらに、パウンドは、イングランドにおいてゲルマン法の要素が存続した理由の1つとして、「教えられた伝統としての強靱さをそれに叩き込む、法曹院において確立された教育課程」(Pound 1921: 17) を挙げている。『コモン・ローの精神』に限らず、パウンドは随所で、英米の法的な伝統の発展について描写してきた。

ここでは、トイフェルスドレックの論文と同じ雑誌上で、前年に発表されたパウンドの論文「コモン・ローとは何か」に注目したい。パウンドはこの論文において、「法のシステムとは、本質的に、理念・方法・教義・原理の教えられた伝統であり、教育課程が途絶えない限り継続するものである」(Pound 1937: 179) と述べている。トイフェルスドレック＝ルウェリンが、この論文を意識していた可能性は高い。

なお、晩年のパウンドは『法による正義』において、「コモン・ローは、法廷での裁定を基礎として、法曹院で教えられた伝統として成長した。それは、17世紀以降、法律家から見習いへと受け継がれる教えられた伝統であり、現在では、大学のロー・スクールで教えられた伝統になりつつある」(Pound 1951: 61) と述べている。晩年のルウェリンも

なかったところに、誇らしげに5または10の生計を立て、20の生計を立てることを可能にする」（Teufelsdröckh 1938 : 172）という。

教えられた伝統の原則は、一見すれば、法理学が教育システムを通じて観念の枯渇を克服し、知の経済を拡大してきたプロセスを示している。しかし、「その一門の領主だけが、何かを少しでも考えたり、思想を持ったりする必要がある。下位の封土所有者は、最初の封土所有者の下にさえいれば、何に対しても権利を保持できる。たとえ最初の封土所有者が何も考えていなくても」（Teufelsdröckh 1938 : 172）と述べられていることから分かるように、むしろ、法理学という営みが必ずしも知的に廉直なものではないという示唆が重要であろう。トイフェルスドレック＝ルウェリンは、権威を笠に着手して思考を放棄した人々が、法理学という営みを墮落させてきたことを批判している。

II 術語の多義曖昧性(Multiguity of Terms)の原則 ——編み出せ！

トイフェルスドレックは、教えられた伝統の原則に続けて「術語の多義曖昧性の原則を導入することによって、〈擬観念〉(*pseudea*) が製造され、迅速に必要な満たされ、それまで流通していたものに加えられ、現代社会でも完璧な通貨として保持・所有されるようになる。精巧に印刷された美しい〈擬観〉念は、〈観〉念という金 (*idea-gold*) と同等の価値があり、紙幣がしばしば金の延べ棒より価値が高いように、〔擬観念が観念という〕金より価値が高いこともある」（Teufelsdröckh 1938 : 173）と述べる。すなわち、法理学は、その術語が多義的で曖昧であるという点を利用して、観

ㄨが『コモン・ローの伝統』において、「判決するすべての人物は、長きに渡って知られ、明確に感じられ、そして誇りにしてきた伝統、すなわちアメリカの上訴審に関する司法の伝統の中で、職責を担う公職者としてそうする」（Llewellyn 1961 : 19）と述べていることと対比すると興味深い。

念にそっくりの擬観念を作り出し、勢力圏を拡大してきた。トイフェルスドレックによれば、「〈そのような〉擬観念（すなわち、芸術的な擬観念）は、それが〔自然の〕観念であった場合よりも、はるかに価値がある。擬観念はすべての人々にとって心地よく、好ましいものであるのに対し、利用可能な観念はすべて、自然が生み出した子供であるため、少なくとも誰かにとっては厳しく、不快であるからである」（Teufelsdröckh 1938:173）という。思いどおりにならない自然の観念と、思いどおりになる人工の擬観念が対比されている。法理学は、術語の意味を自在に操作し、人々のニーズに即した擬観念を作り出す営みとして発展してきたということである。

トイフェルスドレック＝ルウェリンが、術語の多義曖昧性の原則によって示唆するところは、抽象的で包括的な理論を弄ぶ法理学に対する批判であろう。このことは、擬観念の製造と流通が、貨幣経済に仮託して語られている点からも看取される。すなわち、貨幣が信頼とそれを裏づける経済システムによって価値を与えられるのと同様に、法理学が操る理論も、その実質ではなく、伝統の下で受容されることから価値を獲得している。したがって、「しわくちゃの、精巧に印刷された擬観念は、〈恐慌が発生しなければ〉市場を通過するであろうし、兌換のために提示されることもない」（Teufelsdröckh 1938:173）というわけである。

Ⅲ 預金銀行業務(Deposit Banking)の原則および 翻訳(Translation)の原則——信じ込め！

擬観念の流通が問題なく行われるためには、擬観念に対する信用の低下を回避し、「恐慌」を予防する必要がある。そこで、トイフェルスドレックは、「一度に兌換のために提示されるのは、発行済みの通貨のごく一部にすぎない」（Teufelsdröckh 1938:174）という預金銀行業務の原則を導入する。この原則により、金本位制の下での銀行が、発行した貨幣の一部だけを金によって裏づけていたように、たとえ観念の蓄えが少なかったとし

でも、擬観念が観念と同様に有効なものとして流通するような状態が維持される。ここで必要となるのは、法理学の銀行を慎重に管理すること、すなわち「数少ない本当の観念を金庫内に保管し、〈流通させないようにする〉」（Teufelsdröckh 1938 : 174）ことである。トイフェルスドレックは、さらに翻訳の原則を導入することで、古くなった擬観念に代えて、新しい擬観念を「異なるものとして、またその人自身のものとして」（Teufelsdröckh 1938 : 174）流通させることを奨励する。

このように、擬観念の流通は、預金銀行業務の原則および翻訳の原則によって支えられている。しかし、これらの原則もまた、法理学に対する諷刺となっている。預金銀行業務の原則によれば、擬観念のごく一部だけが、兌換のために提示される。すなわち、ほとんどの理論は、現実には照らして厳密に精査されることなく、巷間に流布している。また、翻訳の原則によれば、既存の擬観念を翻訳することで、新しい擬観念として再発行することができる。すなわち、ほとんどの理論は、既存の理論の安直な焼き直しであり、ただ革新性を装っているだけにすぎない。これらの示唆を敷衍すれば、法理学は、あたかも貨幣経済のように、システムの上での信頼を重視する学問であるということになろう。法理学は、膨大な擬観念を通貨として流通させつつも、実際は、基礎となる観念のわずかな蓄えによって発展してきたにすぎないということである。

IV 偏重(Partiality)の原則および穴(Hole)の原則 ——言い放て！

トイフェルスドレックは、擬観念を生産するための原則を2つ紹介している。第1に、偏重の原則は、いわゆる群盲評象⁶⁾の寓話に着想を得たも

6) トイフェルスドレックによれば、象を評価するという目の見えない人々の行動は、ウィリアム・サムナー（William G. Sumner, 1840-1910）のいう敵対的協力（antagonistic cooperation）であり、「我々にとって、献身し、神聖化し、意識化し、普遍化し、教えメ

のである。この寓話自体が多様な解釈の可能性に開かれているが、トイフェルスドレックは、ジョン・サックス (John G. Saxe, 1816-1887) による解釈⁷⁾を前提にしていると思われる。すなわち、「あなたは思い出すであろうが、1人は、法という象を『木のように強大』であると宣言し、1人は『縄のように強大』であると宣言し、1人は『壁のように強大』であると宣言した」(Teufelsdröckh 1938: 175)。ここで、偏重の原則が示唆するのは、「象は木で〈あり〉、または縄で〈あり〉、または壁で〈あり〉、〈それ以上でもそれ以下でもない〉。これは、続けるための何かを与えてくれる。何よりも、象性 (Elephantitude) をめぐる擬論争 (pseu-dispute) と擬反証 (pseu-disproof) を招くものであり、実際の象に関するさらなる調査を促すものではない」(Teufelsdröckh 1938: 175) ということである。すなわち、それぞれに特定の側面を偏重して擬観念を生産することで、いつまでも擬論争と擬反証を続けることができる。さらに、現実の調査が回避されているかぎり、擬観念の信用が低下することもないため、預金銀行業務の

ゝられた伝統とするべきものである」(Teufelsdröckh 1938: 175) という。サムナーは、『フォークウェイズ』において、敵対的協力は「2つの個体または集団が、その間に存在する些細な利害対立を抑えながら、大きな共通の利益を満たすために結合することからなる」(Sumner 1906: 18) と説明している。

7) サックスは、インドの寓話を題材に「目の見えない人々と象」という詩を作った。この詩では、目の見えない人々が象の周りに集まり、1人目は脇腹を触って壁のようであると言い、2人目は牙を触って槍のようであると言い、3人目は鼻を触って蛇のようであると言い、4人目は膝を触って木のようであると言い、5人目は耳を触って扇のようであると言い、6人目は尻尾を触って縄のようであると言って、議論を戦わせる (Saxe 1868: 259-260)。なお、サックス自身は、この詩によって神学論争を揶揄することを意図している。最後の一節で示される教訓は、次のとおりである。

さて、神学論争によくあることだが、
論争している者たちは、私が思うに、
罵詈雑言を浴びせ合っているのだ、
お互いの意味するところを何も理解せずに、
〈そして象についてあれこれ言っているのだ、
1人としてそれを見たことがないのに！〉 (Saxe 1868: 261)

原則とも親和的である。

第2に、穴の原則は、「単にWを加えることにある。我々は、自然において穴(Hole)があるところに全体(Whole)を置き、その全体がどこに存在するのか、または〈その〉性質が何であるかについて、自らの主張を確保する」(Teufelsdröckh 1938:175) というものである。実際に存在しないものを対象とすることで、擬観念をいくらでも生産できるだけでなく、直接的な探究によってその正体を暴かれるというリスクも回避できるということを意味する。トイフェルスドレックによれば、「[穴の] 最も優れた例は主権であるが、規範の妥当性、法の権威、絶対的正義、最高善、法の歴史の段階、リアリストの学派につき、素晴らしいことが行われてきた」(Teufelsdröckh 1938:175) という。リアリストの学派が、存在しないものとして例示されている点が興味深い。

このように、擬観念の生産は、偏重の原則と穴の原則によって支えられている。これらの原則はいずれも、やはり諷刺として捉えられるべきであり、法理学が、現実に照らした精査を拒み、理論の創出に没頭する傾向にあることを浮き彫りにしている。たしかに、そのような傾向は知的な生産活動を促進し、議論を活発にするであろう。また、部分的な性質を絶対化し、「穴」を抽象的な「全体」で埋めることで、法理学は知的な安定性を獲得するであろう。しかし、懐疑なき断定によって探究を回避することは、表層的な理解に陥り、現実からかけ離れた空論を撒布することにつながる。ここに、トイフェルスドレック＝ルウェリンのリアリスティックな姿勢を、ひいてはリーガル・リアリズムに通底する実証的な探究への志向性を読み込むことさえ可能かもしれない。

V 匿名非言及(Anonymous Non-Citation)の原則および 転嫁されたナンセンス(Imputed Nonsense)の原則 ——押し通せ!

トイフェルスドレックは、「これらの〔偏重の原則および穴の原則という〕生産に関する諸原則のほかに、補助的なものの重要な、流通促進に関する諸原則が認められる。それらも、重要度の順に並べるのは難しいが、恐慌を回避し、市場を獲得する上で最も重要な原則の1つが、匿名非言及の原則であることは明白である」(Teufelsdröckh 1938: 175)と述べている。特に重要な原則であると思われるため、長めに引用したい。

たとえば、もし若い法理学者(jurisprude)が人生で成功したいと願うのであれば、ルールが法のすべてであり、究極の目的であるかのように扱う人々に対して大声で抗議し、事実が必要であると叫ぶべきである。〈事実〉という言葉は魅力的に響く。そして、弁護士であれば誰もが、法にはルール以上のものがあることを、自らの弁護士業務から知っている。もし彼が、新星であれ古株であれ、何も読んだことがない、あるいは読んだことを理解していないとしても、それは彼の叫びにとって重要ではない。なぜなら、匿名非言及の原則の下で、彼は誰にも言及する必要がなく、ましてや著作やページに言及する必要などないからである。もし彼が何かを読んだことが〈ある〉のであれば、匿名非言及の原則に、適切なナンセンスの転嫁を付加するだけでよい。すなわち、彼は絶対化された偏重の原則の下で、ルールが重要であると主張したかもしれない名無しの書き手のうちの何人か、または多数、またはほとんどすべての人々に、ルールが〈すべてにおいて〉重要であるという馬鹿げた主張を転嫁するであろう。彼の敵対者はもちろん、彼に対して同じやり方で対処するしかない。彼は事実を求めていると言ったが、それは〈事実以外の何物も〉求めないと解釈されることになる。彼は特定の概念を無批判に追求することを嫌っていると言っ

たが、それは〈あらゆる概念を否定する〉と解釈されることになる。法理学者は、誰を破滅させるにしても、まずその人物を狂人に見せかける（Teufelsdröckh 1938 : 176）。

この一節から明白なように⁸⁾、匿名非言及の原則とは、主張が誰によってなされたかを明示しないように勧告するものである。これにより、精査されることなく、迫力のある議論を展開し、幅広い訴求を獲得することができるようになる。

また、匿名非言及の原則は、転嫁されたナンセンスの原則と併用されることで相乗効果を発揮する。転嫁されたナンセンスの原則とは、極端に誇張された主張を想定するように勧告するものである。すなわち、不合理な主張を一方向的に転嫁して、あつらえ向きの論敵に仕立て上げることを推奨している。

さらに、法理的な議論の参加者が相互に匿名非言及の原則を採用すれば、「俗人による検査を受ける可能性を回避するだけでなく、〈両方〉の側の勝利を確かなものにする」（Teufelsdröckh 1938 : 176）ことができるという。すなわち、外部からの検証を排除するだけでなく、議論の参加者がそれぞれに論敵を用意し、それに対して勝利を収めることが可能になる。ここで、トイフェルスドレック＝ルウェリンは、存在しない藁人形を相手どった議論に耽溺する法理学の傾向を批判している。「我々の母体となる分野である法学でさえ、2人のうち1人だけが勝利する体制を実現したにすぎない。法理学は文明の王冠であり、法理学だけが、相互の勝利、すなわち全員の勝利を可能にする」（Teufelsdröckh 1938 : 176）という皮肉は、法理的な議論が、しばしば独善的で自己満足的であると示唆するものであろう。

8) この一節からは、リーガル・リアリズムが登場した後の、法理学における議論を揶揄する意図を読み取ることもできよう。実際、リーガル・リアリズムは、決してルールを完全に否定するものでも、事実だけに注目するものでもなかった。

VI 利用不可能な権威(Unavailable Authority)の原則 ——煙に巻け！

匿名非言及の原則は、法理学的な議論を効果的に進めていくためのものであって、存在する出典を存在しないように見せかけることは許されない。出典が存在する場合は、それに対する言及が求められる。トイフェルスドレックは、何を出典にすれば議論を精査されずに済むかについて、具体例を挙げながら説明している。

まず、トイフェルスドレックは、「広範な言及は、重みの本質である。〈十分に〉広範な言及によって、すでに手ほどきを受けた者以外の者による探究を妨げることが期待される」(Teufelsdröckh 1938: 176)と述べる。トイフェルスドレックは、情報源を開示するための手段ではなく、主張に「重み」すなわち箔をつけるための手段として、言及を位置づけているように思われる。すでに法理学の手ほどきを受けた者は議論の慣行を分かっているから、そもそも脅威とはならない。警戒すべきはそれ以外の、議論の根底にある矛盾を露呈させるおそれのある者である。トイフェルスドレックによれば、「他の者による探究は、素晴らしい口上と迅速かつ堅実な二次資料によって、簡単に黙殺することができる。したがって、言及はすべきであるが、言及の法理学的な目的を明確に念頭に置いて言及すべきである」(Teufelsdröckh 1938: 176)という。言及の目的、すなわち権威づけという観点から、トイフェルスドレックは以下のような戦略を提案する。

たとえば、判例は容易にアクセスできるため、膨大な量に言及しないかぎり出典にはふさわしくない。また、判例における個別意見は、「我々の通貨と富の基盤であるところの、本質的な不確定性・非検査性・非検査可能性を損なう」(Teufelsdröckh 1938: 175-176)ことにつながるため、出典とすべきではない。預金銀行業務の原則が示唆するように、法理学的な議論を支えるものは「通貨」への信用であるから、それに対して疑義を呈す

るような個別意見には、言及すべきでないという趣旨であろう。

これに対し、英語以外の言語で書かれた文献は、出典としてはるかに推奨される。なぜなら、「ドイツ語・フランス語・イタリア語・スイス語を読める弁護士はいないし、ましてや中国語・満州語 (Manchukuo)・湖南語 (Hunanois)・北京語 (Peipingsh) を読める弁護士はいない」(Teufelsdröckh 1938 : 177) ため、ほとんど理解されないからである。英語以外の文献は精査が困難であり、議論を検証から遮断できる。時代背景に鑑みれば、国際的に洗練された印象が得られるかもしれない。さらに、法理学的な議論における新しい傾向として、法学以外の分野における文献も出典になりつつある。これにより、「単なる『確認できない、または確認しようとなしない〈外国語〉』から『確認できない、または確認しようとなしない〈いかなるもの〉』へと」(Teufelsdröckh 1938 : 177)、出典の範囲が拡大している。このような傾向を支えているのが、利用不可能な権威の原則である。

このように、利用不可能な権威の原則は、言語の壁や専門性の壁など、様々な理由から容易に検証できない文献を出典とすることを推奨する。アクセスが困難な出典を戦略的に活用することで、法理学者の議論は重みを増し⁹⁾、同時に精査から保護される。しかし、それが虚偽脅しであることは明白であろう。すなわち、利用不可能な権威の原則の示唆するところは、法理学における無意味な権威づけに対する批判である。トイフェルスドレック＝ルウェリンは、法理学が、検証から切り離された空論を弄び、

9) トイフェルスドレックによれば、「彼〔若い法理学者〕は、言及と借用によって、重みを増していく。そして、自分のものに両替したいと思ったときには、翻訳するか、擬実行する (Pseu-do) だけでよい」(Teufelsdröckh 1938 : 177) という。すなわち、広範な言及の積み重ねを背景として擬観念を作り出すことで、知的権威としての名声を獲得することができるようになる。また、「建設的な側面において、豊穡の角のような利用不可能な権威をつなぎ合わせることは、闘争的な側面における匿名非言及と同様に、本当に適切な実践にとって必要となる」(Teufelsdröckh 1938 : 178)。すなわち、一方で、各所から集めた権威を積み上げることによって、他方で、架空の巨悪に対峙して英雄的に立ち向かうことによって、知的な正当性を主張することができる。

知的な正当性を粉飾していることを諷刺している。ここでも、探究より議論を優先するという、法理学の悪癖が別袂されている。

Ⅶ 争点の非結合(Non-Joinder of Issue)の原則 ——逃げ回れ!

トイフェルスドレックによれば、「枢要な原則は、大胆に言うならば、法理学というフォーラムの性質と、常に存在する恐慌回避の機能に依存している。それは、争点の非結合の原則である」(Teufelsdröckh 1938: 178)という。すでに述べた諸原則も示唆するとおり、法理学というフォーラムは、議論の参加者が直接に対決し、白黒はっきりさせるという場所ではない。しかし、参加者相互の争点が結合されれば、いずれ白黒はっきりさせざるを得なくなる。そこで、争点の非結合の原則は、「すべての人々は自身の争点を提起し、誰も他人の争点に気づきもしなければ、それを結合することもない」(Teufelsdröckh 1938: 178)という方針で、直接対決を回避するように促す。これにより、議論が決着しない状態が維持され、法理学という営みは安定性を確保することができる。匿名非言及の原則が示唆したような、全員の勝利も容易になるであろう。トイフェルスドレックは、特に「教えられた伝統を〈通貨として〉、平和的に、恒久的に、兌換の求めなく、〈恐慌を起さずに〉維持すること」(Teufelsdröckh 1938: 179)が法理学の主要な課題であるとして、いかなる争点の結合をも禁止している。

争点の非結合の原則もまた、教えられた伝統が循環的に流通する中で、議論のための議論に明け暮れる法理学を諷刺している。法理学は、知的な神秘のヴェールに身を包み、争点の結合および探究を放棄してしまっている。しかし、全員が勝利するという陳腐な幻想に浸り、無限のフォーラムで薬人形論法に興じる様子は、とても褒められたものではない。

VIII 暗黙の冷蔵保存 (Tacit Cold Storage) の原則 ——聞き流せ！

最後に、トイフェルスドレックは、法理学という営みを脅かす人々に対処するため、暗黙の冷蔵保存の原則を導入する。我々の中には、「争点の明確化と結合を試みようとする急いだり、銀行の金庫室に時限錠の下で保管され、式服と装甲車と護衛を伴った公認の審査官が祝祭日にのみ眺めることのできる、数少ない貴重な本当の観念を検査に持ち出すことに神経的な関心を持ったりする、思慮に欠け、自己顕示欲が強く、手に負えず、無知で、不用心な人々が、常に存在する」(Teufelsdröckh 1938: 179)。しかし、そのような人々を迫害することは、かえってその探究心を駆り立ててしまう。そこで、暗黙の冷蔵保存の原則は、そのような人々を無視するという形で対処する¹⁰⁾。おかげで、「そのような多数の破壊者がいてもなお、我々の法理学における通貨が十分に流通し、完全に健全である状態が保たれている」(Teufelsdröckh 1938: 180) という。

暗黙の冷蔵保存の原則は、知的な伝統に疑いを持つ人々を疎外するという、法理学の閉鎖的な姿勢を諷刺するものであろう。トイフェルスドレック＝ルウェリンは、法理学を脅かす人々に対して、「私だけのものではな

10) トイフェルスドレックは、冷蔵保存された人物の代表としてジョセフ・ビンガム (Joseph W. Bingham, 1878-1973) を挙げる。ビンガムは、プラグマティックな方法に基づき、法を心の中の道具として捉えつつ、リーガル・リアリズムの先駆となる主張をした人物である (菊地 2022: 19-25)。トイフェルスドレックによれば、「これほど突然かつ破壊的に、完全かつ優良な通貨を下落させようと試みた書き手はほとんどいない」(Teufelsdröckh 1938: 180) という。その他、オーリン・マクマレー (Orrin K. McMurray, 1869-1945)、ヘンリー・バラントイン (Henry W. Ballantine, 1880-1951)、ジョージ・コスティガン (George P. Costigan, 1870-1934)、クラーク・ホイットリア (Clarke B. Whittier, 1887-1996)、マックス・レイディン (Max Radin, 1880-1950)、アルバート・ココウレク (Albert Kocourek, 1875-1952)、ロン・フラー (Lon L. Fuller, 1902-1978)、レオン・グリーン (Leon A. Green, 1888-1979)、モーティマー・アドラー (Mortimer J. Adler, 1902-2001) が冷蔵保存されているという。

く、同業者たちのものであり、正気の人々のものであり、レミュエル・ガリバーのものであろう非難を、明確かつ力強く表現できたと信じている」(Teufelsdröckh 1938: 179)と述べることで、その閉鎖性を際立たせている。『ガリバー旅行記』の主人公が引き合いに出されているのは、諷刺的な性格を強めるためであろうか。または、完全な理性の統制下にあるフウイヌム国に、法理学を重ねるためであろうか。

さて、トイフェルスドレックは、以上の諸原則が何世紀にもわたる経験を踏まえた安全な原則であることを強調したうえで、『ヨハネによる福音書』を彷彿とさせる¹¹⁾印象的な言い回しで論文を締めくくる。

自然は、1人にさえ十分な住処や食料を用意できないが、法理学の家には住まいがたくさんあるだけでなく、すべての人々のための住まいがある。この我々の文明の王冠を彩る最も輝かしい宝石とは、これらの住まいがどれだけ多様であっても、4次元のように、同時に同一の空間を占めることができ、そのすべてが壮大であるということである。どの住まいも、それら自体が3次元的に無矛盾である必要さえない。わずかな矛盾が、好ましい側面を大いに高める。そして、俗人たちによって投げられる石は、窓を割ることもなく通り抜けていく (Teufelsdröckh 1938: 180-181)。

ここまでの説明を踏まえれば、この一節が示唆するところは明白であろう。自然の観念と人工の擬観念との対比を下敷きとした、法理学に対する過剰な称賛は、その自惚れに対する嗤笑である。トイフェルスドレック＝ルウェリンは、法理学における無限のフォーラムが、相互に矛盾する壮大な理論をすべて受け入れつつ、外部からの批判を受け流す様子を描くことで、その空虚な自己完結性がいかに滑稽かを表現している。

11) 『ヨハネによる福音書』14章2節には、「私の父の家には住まいがたくさんある。もしなければ、私はそう言っておいたであろう。あなたがたのために場所を用意しに行くのだ」とある(日本聖書協会 2018: (新)192)。

IX 通貨の堅牢性(Solidity of the Currency)の大原則 ——勝ち誇れ！

論文は以上であるが、付録として「トイフェルスドレック教授の修正計画を示す手紙」(Teufelsdröckh 1938 : 181) という文章が続いている。この手紙は、トイフェルスドレックの論文を読み、批判を述べた同業者に対する応答(という設定)である。むろん、批判そのものは掲載されていないが、その内容は利用不可能な権威の原則と、匿名非言及の原則との矛盾に関する指摘(という設定)であると推測される。すなわち、前者は「サムソン(Samson)のやり方で1万のペリシテ人を打倒するというリリパットの実践¹²⁾」(Teufelsdröckh 1938 : 181)のように、広範に言及することで権威を積み上げるという戦略を提案するのに対し、後者は「聖ゲオルギオス(St. George)のやり方で打倒すべき竜を創造するというラプータの実践¹³⁾」(Teufelsdröckh 1938 : 181)のように、言及しないことで巨悪を作り上げるという戦略を提案しており、両者の併用には限界があるにもかかわらず、そのことが警告されていないという批判である。

トイフェルスドレックは、この批判に対して、「敵対者が〔リリパットの実践のように〕増殖しようが、〔ラプータの実践のように〕増幅しようが、〔敵対者の巨大化という〕同じ効果が得られる」(Teufelsdröckh 1938 :

12) サムソンは『土師記』に登場する怪力の持ち主で、無数のペリシテ人を殺害した(日本聖書協会 2018 : (旧) 389-395)。また、『ガリバー旅行記』第1部の舞台であるリリパット国は小人が住む国で、同じく小人が住むブレフスキュ国との戦争を行っている。ガリバーは、リリパット国のためにブレフスキュ国と戦い、50隻の軍艦を一網打尽にした(スウィフト 2022 : 70-74)。

13) ゲオルギオスは、竜退治の伝説で知られるキリスト教の聖人である(高橋 2017 : 33-36)。また、『ガリバー旅行記』第3部の舞台の1つであるラプータ島は空中に浮かんでおり、下界のバルニバービ国を支配している。ガリバーがラプータ島を訪れる3年前に、バルニバービ国の第2の都市リンダラーノの人々は、ラプータ王の専政に対して反乱を起こした(スウィフト 2022 : 253-264)。

181) ため、矛盾はないと応答しつつも、反対に「敵対者の矮小化に対する警告は不要であると、あまりにも軽く考えていた」(Teufelsdröckh 1938 : 182) ことを認める。そこで、トイフェルスドレックは批判に感謝しつつ、自身の論文に欠けていた「法理学の第1原因(Primum Mobile)、ほかならぬ法哲学者(Legal Philosophers)の石」(Teufelsdröckh 1938 : 182)として、通貨の堅牢性の大原則を導入する。

通貨の堅牢性の大原則は、法理学の究極的な目的を通貨の堅牢性の証明、すなわち教えられた伝統の正当性の証明に求める。トイフェルスドレックによれば、「〈通貨の堅牢性が検査として受け入れられ〉れば、あらゆる問題、疑問、または一見したところの矛盾は〈自動的に〉解決される」(Teufelsdröckh 1938 : 182)という。なぜなら、伝統が正当であることを顕示するためには、矮小な敵対者ではなく、巨大な敵対者を打倒する必要があるからである。したがって、「この原則を公式として受け容れた者は、もはや決して冷笑をもって敵対者を退けることはないであろう」(Teufelsdröckh 1938 : 182)。このとき、利用不可能な権威の原則と匿名非言及の原則は、いずれも敵対者を巨大化するための原則として、矛盾なく機能するようになる。

通貨の堅牢性の大原則は、すでに述べた諸原則と同様に、権威にしがみついた法理学を揶揄するものである。さらに、この大原則は、法理学における伝統への信頼を維持するために、巨大な敵対者への勝利を演出するという手法が用いられていることも暴露している。トイフェルスドレック＝ルウェリンは、法理学的な議論が単なるパフォーマンスにすぎないことを看破している¹⁴⁾。さらに言えば、この諷刺が架空の批判に対する応答という

14) トイフェルスドレックは、論文において争点の非結合を強調しすぎたことを、付録において反省している。さらに、非結合はあくまで最終的なものであるとして、「法理学はこの点で、私が読んだことのある、あなたの国〔アメリカ〕で『10-20-30 (ten-twenty-third)』と表現される一種の演劇と変わらない」(Teufelsdröckh 1938 : 182)と述べる。10-20-30とは、映画産業が本格化する以前の、1890年代から1900年代にかけて流行したメロドラマ演劇であり、入場料が10、20、30セントであったことに由来する(Singer ↗

形をとっていること自体が、トイフェルスドレック＝ルウェリンによるパフォーマンスということになろう。この世はすべて1つの舞台、法理学者はみな役者である。この論文および付録もまた、通貨の堅牢性の大原則によって支えられているというわけである。

おわりに

本稿では、ルウェリンがトイフェルスドレックを演じつつ、諧謔を弄して法理学に加えた批判を検討してきた。冗談の解説は蛙の解剖に似ている¹⁵⁾とはよく言ったもので、その意味が分かった時点で冗談はもう死んでいるわけであるが、野暮を承知で、行間や飛躍を適宜補いつつ、敢えて頻繁に引用しながら逐語的に解説するように心がけた¹⁶⁾。難解な「ルウェリン語 (Llewellynese)」(Hayakawa 1964 : 718) の数々がどれだけ理解しやすくなったかは、読者諸賢の判断に委ねるほかあるまい。

↘2001 : 149-188)。トイフェルスドレックによれば、議論における争点の「見せかけの結合」(Teufelsdröckh 1938 : 182) は、10-20-30の剣戟と同じように、傍観者を刺激する。さらに、最後の一撃を脇腹と腕の間にすり抜けさせて、あたかも剣を刺したかのように演じるところに、争点の「非結合の永遠の役割」(Teufelsdröckh 1938 : 182) が見出される。ここでも、法理学的な議論の演劇的な側面が諷刺されている。

- 15) あるアメリカの冗談集に、「分析者は冗談に挑戦してきたし、私もそのような解釈の文献をいくつか読んだが、大きな教えは得られなかった。冗談は蛙のように解剖することができるが、その過程で死んでしまい、その中身は、純粹に科学的な思考を持つ者以外を落胆させる」(White & White 1941 : xvii) という記述がある。
- 16) もちろん、すべての諧謔の意味を解明できたわけではない。たとえば、トイフェルスドレック＝ルウェリンは、利用不可能な権威の原則により、「図書目録で〈法〉という語を表題に含む著作だけに引用を限定する代わりに、心理学・果実学・発生学・神学・倫理学・家政学・経済学・政治学・棒・現実棒・記号論理学 (psychology, pomology, embryology, theology, ethics, home economics, economics, politics, the sticks, the realsticks, and symbolic logic) へ繰り出すという最近の傾向が見られる」(Teufelsdröckh 1938 : 177) と述べているが、棒および現実棒が何を示唆しているかは不明である。おそらく、学問名を表す接尾辞 ics にかけることで、学問への過剰な信仰を諷刺するものと思われる。後には、「棒または統計棒の書き手 (writer in the sticks or the statisticks) が、『法理学』と銘打たれた長文を読むであろうか？」(Teufelsdröckh 1938 : 177) という表現もある。

一連の諸原則が壮大な諧謔であるという前提に立てば、それらが示唆するところを反転させれば、我々は、ルウェリンが奥義とする法理学の作法を獲得できるはずである。すなわち、伝統を疑い、権威を疑い、理論を疑い、主張を疑い、出典を疑い、歴史を疑い、法理学そのものを疑う——結局は、健全な懐疑主義がルウェリンの真髄ということである。そのルウェリンがルールを疑うことは、もはや必然ともいえよう。

ルウェリンの分身であるトイフェルスドレックの文体についても、若干の考察を加えておこう。まず、比喻や対句といった修辞法を駆使した装飾的な文体が、過剰な大きさを演出し、諧謔を効果的なものにしてている。また、『ガリバー旅行記』をはじめとする文学的な源泉をパロディすることで、諧謔的な視点がいつそう強調されている。さらに、全体を通じて多用される造語は、伝統的な慣行を嘲笑い、その威厳が見かけ倒しであることを白日の下に晒すものである。その顕著な例が *jurisprude* である。この造語はルウェリン語の中で最も普及したものの1つであり、本来は、銜学的な法理学者への軽蔑を意味するものである (Hull 1996 : 133-138)。本稿では単に「法理学者」と訳出しているが、実際には「法理学者風情」のようなニュアンスを含んでいることに注意されたい。

ところで、なぜルウェリンはトイフェルスドレックを演じる必要があったのか。分身論の古典は、「自我の分裂を引き起こす最も顕著な症状として、過大な罪の意識があらわれる」(ランク 1988 : 105) と教える。トイフェルスドレックの論文が公表された1938年は、ルウェリンが公私ともに多忙を極めていた時期に重なる。この時期、ルウェリンは統一商事法典の起草に携わる一方で、療養を要するまでに深刻なアルコール依存に陥っており、当時の妻との関係も破局の兆しを見せていた¹⁷⁾。すなわち、トイ

17) ルウェリンは、2番目の妻であるエマ・コーストヴェット (Emma Corstvet, 1897-1984) と1933年に結婚し、1946年に離婚した。その原因は、アルコール依存および(後に3番目の妻となる)ソーヤ・メンシコフ (Soia Mentschikoff, 1915-1984) との不倫であった(菊地 2024 : 7-12)。

フェルスドレックとは、悪魔の美酒¹⁸⁾に溺れたルウェリンの罪悪感であったのではあるまいか。

おお おれに生き写しの 青ざめた男よ
なぜ まねるのか おれの 恋のなやみを
くる夜も くる夜も その場所で
なやみぬいた 過ぎし日の おれを
——ハインリヒ・ハイネ¹⁹⁾

参考文献

- Hayakawa, T. (1964). Karl N. Llewellyn as a Lawman from Japan Sees Him. *Rutgers Law Review*, 18(3), 717-734.
- Hull, N. E. H. (1996). The Romantic Realist: Art, Literature and the Enduring Legacy of Karl Llewellyn's 'Jurisprudence.' *American Journal of Legal History*, 40(2), 115-145.
- Llewellyn, K. N. (1942). On the Good, the True, the Beautiful, in Law. *University of Chicago Law Review*, 9(2), 224-265.
- . (1961). *The Common Law Tradition: Deciding Appeals*. Boston: Little, Brown.
- Pound, R. (1921). *The Spirit of the Common Law*. Boston: Marshall Jones Company.
- . (1937). What Is the Common Law. *University of Chicago Law Review*, 4(2), 176-189.
- . (1951). *Justice According to Law*. New Haven: Yale University Press.
- Saxe, J. G. (1868). *The Poems of John Godfrey Saxe*. Boston: Ticknor and Fields.
- Singer, B. (2001). *Melodrama and Modernity: Early Sensational Cinema and Its Contexts*. New York: Columbia University Press.

18) エルンスト・ホフマン (Ernst T. A. Hoffman, 1776-1822) の『悪魔の美酒』(ホフマン 2022: 5-303に収録)において、主人公のメダルドゥスは、悪魔の美酒を飲み干したことで引き裂かれ、分身であるヴィクトリンに付きまといられることになる。

19) ハインリヒ・ハイネ (C. J. Heinrich Heine, 1797-1856) の『歌の本』より引用した (ハイネ 1973: 37)。

- Sumner, W. G. (1906). *Folkways: A Study of the Sociological Importance of Usages, Manners, Customs, Mores, and Morals*. Boston: Ginn and Company.
- Teufelsdröckh, D. J. S. (1938). Jurisprudence, the Crown of Civilization: Being Also the Principles of Writing Jurisprudence Made Clear to Neophytes. *University of Chicago Law Review*, 5(2), 171-183.
- White, E. B. & White, K. S. (eds.) (1941). *A Subtreasury of American Humor*. New York: Coward-McCann.

- イエーリング、ルードルフ・フォン (2009). 『法学における冗談と真面目——法学書を読む人へのクリスマスプレゼント 笑いながら真実を語る』 眞田芳憲・矢澤久純 (訳)、中央大学出版部.
- カーライル、トマス (2014). 『カーライル選集1 衣服の哲学〈デジタル・オンデマンド版〉』 宇山直亮 (訳)、日本教文社.
- 菊地諒 (2022). 「ジョセフ・W・ビンガムの法思想史的位置」立命館法学403号 1-29頁.
- 菊地諒 (2024). 「カール・ルウェリンと3人の妻」立命館法学411・412号 1-20頁.
- スウィフト、ジョナサン (2022). 『ガリバー旅行記』 柴田元幸 (訳)、朝日新聞出版.
- 高橋輝和 (2017). 『聖人と竜——図説 聖ゲオルギウス伝説とその起源』 八坂書房.
- 日本聖書協会 (2018). 『聖書 聖書協会共同訳〈旧約聖書続編付き 引照・注付き大型〉』 日本聖書協会.
- ハイネ、ハインリヒ (1973). 『歌の本 下』 井上正蔵 (訳)、岩波書店.
- パウル、ジャン (2000). 『ジーベンケース』 恒吉法海・嶋崎順子 (訳)、九州大学出版会.
- ホフマン、E. T. A. (2022). 『ホフマン小説集成 下』 石川道雄 (訳)、国書刊行会.
- ランク、オットー (1988). 『分身——ドッペルゲンガー』 有内嘉宏 (訳)、人文書院.

* 本稿は、JSPS 科研費 (課題番号 23K01067) の助成による研究成果の一部である。